大津土産 吃又平名畫助刀

上下 弐巻

西垣文庫
文庫10
6754

文庫10
6754

大津繪

江戸前の市隱

三馬編

一名を追分繪といふ大津大谷の邊にて鬻ぐ往古は佛像なとのみ画きしを
かの浮世又平重起或ハ土佐又平久吉なといへる者はじめて画しと或ハ又兵衛なと異
説まちまちにして詳ならず又いづれの時代より始まりしや詳ならず
友人京傳子が大津繪の纂考あれバ爰にも記さず
嚮に近松翁の著しる傾城反魂香の雑劇謡曲を翻し遊び小説不破名
古屋が筆蹟に取られ此の又平が金心鉄膓の忠義傳を綴録するを省文略
語小紙上にあれバ看官恕して欽白

維時文化年丁卯秋八月脱稿戊辰春正月發兌

ラツセル氏重輕罪論第一二四葉
ホワートン氏米國刑法第一八葉

タリ其著クル所ノ短衣ハ大禮服タリ荷衣タリ而シテ其伴フ所ノ同室患者ハ臣下タリ信者タリ他人若クハ外物ニ關スル智覺アルヘキモノニアラス況ンヤ其所爲ノ是非ヲ辨別スルノ智覺ヲヤ刑法ノ責任ヲ負フノ能力ナキヤ明ナリ然レトモ我刑法ハ單ニ第七十八條ニ於テ「罪ヲ犯ス時智覺精神ノ喪失ニ依リ是非ヲ辨別セサルモノハ其罪ヲ論セス」ト云ヒ瘋癲者ノ所爲ノ點ヨリ其罪ナキコトヲ定メ人ノ能力上ヨリ其不論罪ヲ定ムルコトナキハ稍々學理ニ違フノ嫌ナキニアラサルモ間發症ノ瘋癲カ精神靜止ノ時ニ於テ罪ヲ犯シタル者ヲ不問ニ附スルカ如キコトナカラシメントノ注意ニ出テタルモノニ似タリ但シ精神靜止ノ時ニ犯シ

責任ヲ負フヘキ能力ノ有無ハ犯罪者タル人ニ就テ論スルモノナリ學者往々此二者ヲ同視シ犯罪ノ責任ヲ負ハシムルニハ智識ト自由トヲ以テ其要件トスレトモ智識ノ有無ハ犯人ノ能力有無ノ問題ニ屬シ自由ノ有無ハ所爲ノ存否ノ問題ニ屬ス但シ自由ト責任トノ關係ニ就テハ尙ホ本款第二章第三節第三段ヲ參照ス可シ

ベルトール氏佛國刑法第十章
クラツフト、エビング氏刑法心理論第七八葉
ラツセル氏重輕論第一卷第一二〇葉

第三節　犯罪主體ノ不能力

第一段　瘋癲及ヒ幼者

瘋癲ハ全ク人類ノ智能ヲ缺クモノナリ狂者ノ其己レヲ見ルヤ君主タリ耶蘇タリ仙人タリ自己ニ關スル智覺アルヘキモノニアラス其監禁セラルヽ所ノ密室ハ宮城タリ天上

述意

世に流布の復讐奇談を見るに
五分ハ生の作例善悪の半を
別さ五分ハ生の薄命五分ハ五の
造化を綴て一部の意旨とせり
此小説ハ旧古の作例にあらねど
雲谷が虎肝狼膽の悪行ハ僅に
要を摘てここに委しうせバ又平
が忠心義志竟にハ助刃の勲
功をあらハしたる事跡を録も
是をまいち新奇の風体なり画
に古今を混じ文に雅俗を雑
るハ素より赤本の習俗なれバ
あながちとがむるなかるべし
○物と事とによりて文体を
変じ浄瑠璃のごとき作文ハ

式亭一流の赤本新奇は
口調よくて婦女子の読やすく
解し易からんためなり
●文の俗とい
「こやせんゐるもなつきあるぞ男
おさきまするいおらしさ
「又後年後刻のまで残
ぬかて」など
●言の俗とい
いつそこそいふ
「いざ」「なあ」
「おんのんさめぐ
いくべくどやあ
ねへらあんざうおもしぐつて
とうもこくくられねへつちやわねへ
ひさぐいをいふありゑるひと
けり出なしとぞそーやまめふるす
あられ

四季山人欽白

不錬金丹不坐禅
不為商賈不耕田
閑来寫幅丹青賣
不使人間造業銭

にいかふ土佐の
おたがうた
よく又平ちやげおもへてふ動ぐ
うたわりもと変おのうかれかりしがきこの
ミちかふおけしんふうくきのおやげんこう
のぶの門人ことありまゆもふたさらざりしかども
田舎おゐてかんさうげ土佐の事しも
あのりがくいのるいむかしくきてらい
うねよ又平がうたなりのへうやれつい
くちどゆりごんぜつわざうちのざるうく
のへかうしくてあんぶらいへつきうそこの
ひうちばこおさふのけぶりさへいちどを
一どふおひやけや大津のくられふを君ね
しすびとりのらがあふうりつ子の
福たるのしてふつるのあふでいきのぐ
どくふらうまてきうたよ君のふでの
おくまへわそゆとてのぼりんぐりのきゐるの
もらべまけしのこゑげあの三せんめせんの

大津絵(おほつゑ)元祖(ぐわんそ)浮世(うきよ)又平
俗ニ吃(ども)の又平といふ
将監門人(しやうげんもんじん)
土佐(とさ)又平重起(しげおき)

あきみひおいのちもぜるもつあきしが
んきぜうけし玄どくやさまおせさうの
おんざさでしきれゆうをさうかしべつび
すぎしてふきびえやうそもうへんとひふ
おあひのなきしいうせもうげんへひとなま
つくりうへらんせうとろきくりうまふせきの
あるなむくびゑとてかけんれこうり
ねぐゞもごうんのち、なえとくむせせ
いみおあれてぜひあくまうたとし月
ふるそきぞしける

これハ本文のかいとまで一ゝこのつだよりものがたりの本ぶんはじまるなり

「うかれたり
ぬけらで
うぐいう
とびゆく

大津絵(おほつゑ)の
筆(ふで)のはじめハ
何(なに)
ほとけ
はせを

○又平つねふ者を
うくとれハ大せうを
こゝろのうちにふし
おがミかゝせ
つくりのふうたい
言師のみげ
ありと
くちの内にて
となへさりと
いひと
ありしきうや
あやしき
くゐたうの
づきみがきしみ
なきさのくるぶころ
うまのうちよりぬけらで
こゝろそろあそび
ゆきしハふしざき
ありしをどめあり

大津土産 吃又平名畫助刄前編

東都 式亭三馬編述

○發端

人王三十九代。後柏原院の御宇。永正のころ。近江の國。六角左京大夫頼賢れ。近江源氏。佐々木家のちやくりうにて。高島殿とまをす。けいづ。ゑよれう。ならびなき。名家までぞありける。此君すぐれて。ゑをこのみたまひけれバ。めしつかはるゝ。ゑだくみまれ。土佐の將監みつのぶならびよ。小栗藤太郎むねたか。長谷部雲谷。此兩人ハ同年十八歳。なの〱。筑うせてハら。ゑやうげんが門人となりしが。ふぢ太郎ハ宗丹のばつえうにて。生れつきかしこく。ゑもおのづからめいじんのきざしあり。又はせべうんこくハねいかん。ゑやちのものにて。ゑのみちようとく。はなはだつたなかりしかバ。つねよいけんとくハへけれども。うんこくさらにもちひざり

しとかや。此しやうげんがつまれ身まかりて。
らうすいの身のたのしみまれ。一人のむすめ。
繪絹とてとし十六歳みめかたち世まこえて
うるはしく。こゝろすなほまして をんなのて
ざなまひとつくらからず。ことにかうしんわ
つくちゝふつかふると。いとまめやかにわり
けれバ。しやうげんいかまも〳〵てよきむこを
えらミ。とさのいへさうぞくさせんとぞおも
ひふくみける

繪巻物牛塔之圖

一名霜牛塔又迦葉塔

されバふぢ太郎と。うんこくとハあひでしのことなれバ。つねにしたしくまじハりしが。あるときやかたのおんこのみにて。同國せき寺うし佛のゆらい。ゑまきものをこしらへんとありて。ゑハふぢ太郎うんこく兩人おの〳〵心のまゝにゑがくべしと。ふたまきのまきものをわたされけるにぞ。兩人かんたんをくだきてちうやにせうじもしたりける○そもそも此うしぼとけといへるハ榮花物語淡海志などにもしるせり。そのむかし關寺ハ七堂がらんにて坊舎あまたあり。五丈の彌勒佛ハ日本三大佛のひとつにて。此みろくぶつをあんちする大寺こんりうのとりから。迦葉佛かりに牛とありてざいもくをはこびたまひ。がらんせうじゆのゝち。みろくのまへにてうせければ。かのところにうしぼとけをはうぶりてつかのうへにハ石にて五重のとうをつくりしとかや。これを。さうぎうとう。又かせうともいへり。今關寺のあと長安寺のまへにある牛の塔こそあり。いにしへハ五重のとうありしが。ものゝはりはしうつりて。わづかに一重のこれり。さるほどに兩人うしぼとけのまきものをゑがきつるに。雲谷ハ今やうのさまをうつして一重のとうにうつしぬ。またふぢ太郎ハえいぐわものがたりなどをもひやりて。古圖のごとく五重にゑがきければ。ゑことゞのおもむき。かなひしのみならず。ひついそるはり。畫才のひいでたるとかんじたまひ。かさ〳〵のひきでものをたまはりしかバ。ふぢ太郎めんぼくとほどこしけり。このゝりしかバ雲谷がしゆびもつてのほかあしく。家中の人々ゆびさしてへたゑのうんこくとぞわらひける○茲にまた藤太郎と雲谷ハゑのいとまに馬のるわざとこのみて。たがひにをしもつたつしやなりければ。そのきこえたかく。一家中にとりさたしけり。しかるにうんこくおもひけるハわれさいつころ。うしのとうのゑにハおとりしが。馬しゆつハわれにかなふま

じ。なりわらバくらべうまにのりかちてはぢとあたへくれんずと。心にたくみゐたりしが。あるときれいのごとくばゞに出て馬をせめけるついで。藤太郎はむかひていふやうそれがしすこしののぞみあり。此のぞみかなふか。またかなはざるか。馬をもつてうらないたし。それがしわざのにかたバのぞみかなふのしるしなり。もしわざのまくるときはわがのぞみむなしとせん。いで〳〵くらべ馬したまへとありければ。ふぢ太郎も心のうちはすこしのねがひあり。しからバことばにしたがふて。くらべ馬のしやうぶをきそめ吉凶をうらなふべし。されども両人のねがひのおもむきたがひに手のひらにかきしるししやうぶをとりてのち双そういつときに手をひらくべしとけいやくし。馬六疋を左右にわけてしやうぶ三べんをかぎり。すでに両人のり出しけるにまづ一ばんはふぢ太郎なんのくもなくまけゝるまぞ。うんこくのつよのりて馬

をせするにのちの二せんはうんこくつゞけてまけしのみならず。おゝろあせりて馬よりどうとおちたりしは。見ぐるしかりしありさまなり。されどもけがはあらざれバ。すなうちはらひて立上り。しやうぶはときのうんなればせひにおよばずと。にがわらひしてそのばを立去り。さてありてけいやくのごとく双方にぎりし手をひらけバ。これもとよりやゐのねがひにあらずとさのしやうげんがひとりむすめゑぎぬにれんぼのことしるしてこひのかなふかかなはざるかをうらなひ見。両人の心中わりふをあはせしごとくなれバ。たがひにうちわらひてわかれさり。しかれどもうんこくはこひのかなはざるしるしにやありけんくらべうまにはのりまけ。あまつさへらくばしたるといきどほりて。つみなきふぢ太郎にうらみをかさね。これよりのちます〳〵ねたみそねむのこゝろをおこしぬ。それにひきかへりてふぢ太郎はわがこひのかな

ふべきしるしをよろこびて。つねにしんずる近松御坊をふしおがみし
ぎぬが方へいひよらんてだてをぞめぐらしける。
一説に曰凡三疋の馬をくらぶるには。まづ一ばんにつよき馬を出
すとみてこなたよりは。すぐれてよわきうまをのりんざして一ば
んにのりまくるなり。あいてかつにのりてよわきを出さば。それと
きちうぐらゐの馬にのりかつゆゑはいてせんかたなくのこりし
よわき馬にてのり出すを此方よりはのこしおきたるつよき馬に
てものゝみごとにのりかつものといへり。これくらべ馬のごくひ
あるをふぢ太郎かねてよりうくでしたりしさいちのほど世にた
ぐひなきわうものなり。

○されば両人こゝろをへだてゝしぎぬがこひぢをあらそひしが。ふぢ
太郎がきやしやふうりうのおもむきに雲谷むくつけなきすがたをく

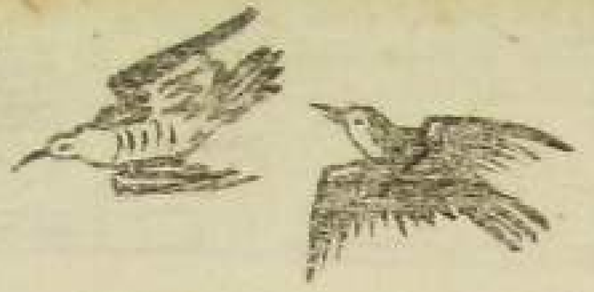
らべては。花のうたはらあるみやま木のごとく。さうなくしぎぬがした
がふべしとは。おもはれざりき。こゝにとさのしやうげんがふだいのし
もべ雷作といふもの。忠信あつきうまれつきありしかば。父子のちやう
あいとえて。なほもげみつかへけるをふぢ太郎この雷作とあつくまじ
はりてひそかにしぎぬがもとへのつるをたのみ。けさうぶみをおくり
けるが。らいさくが心中かゝるみそかごとのなかだちすべきものなら
ねども。にあはしき。きりやうとしごろ。ずゑ〴〵はふうふにもなりなん
とおもひければ。こゝろよくうけひきてかのふみをばひそかにしぎぬ
へぞつうじける。しぎぬはかの玉づさをひらき見るにはり川大じやう
大じんの古歌を引て「あふさかのせきとはいへどはしりゐのみづをば
えこそとゞめざりけれ。とかきたりしが。此心はたとひ人目のせきにへ
だつともはしりゐの水せかれぬごとく。父のめをしのびてひとよあり

ともおふさか山のかひあるへんじあれかしと。心をこめしみづぐきに
こしり井のさそふ水しあらバいなんとおもふ。ゑぎぬがこゝろねうれ
しさいさんかたなくていそがれしく。へんじゑたゝめ。これもおなじく
後選集のうちなる三條のうだいじんが。古歌のかみのくばりりをかへ
しとれなしぬ。もとよりこれハゑぎぬがなぞあてありけれバ。ふぢ太郎
大によろこび。さてハこのゑものくのごとく「人にゑられてくるよしも
がな。人ゑれずかよふよすがもあらバ。せきのとざしをひらきてまたん
と。あるこゝろざしよと。天よものぼるおもひにて。いつあふ坂のこまむ
かへ。せきもる神のゆるしをまちしがいつしかふかきなかとなりてぞ。
をりふしあうよひける。かのよろづをがよめりし戀の歌よ「あふさかの
せきしまさしきものなふバなりずわかるゝきみをとゞめよ。かくつゞ
りしもそれらのたぐひよこそ。

○さてもさせべうんこくハあるひ。れいのごとくしやうげんが家にき
たりてしとまなびゐけるが。此ほどのさましひれつもむかりもしのみ
ちにおもむかず。ひたすらしぎぬがてひおに心とゆだねしかバ。人なき
ひまをうかゞひて。しぎぬが袖しかとゝらへ。心のたけとかきくどきて。
左りの小ゆびをきりおとし手むやくかみにおしまきて。しんしよにそ
りそへおもいだせバ。しぎぬおどろきて。そでふりはらひ。のがれんとす。
雲谷小もびとみとをもちそへせひとえらバず。わたさんとあふそふと
ころに。しやうげんが手かひの美和といふ小さるひとまよりかけきた
りしが。やかれに雲谷が手へとびかゝり。しんしよと小もびかいつかん
で。しやうげんがゐまへかけいりぬ。此暇にしぎぬハ袖ふりはらひてに
げ入ければ。雲谷たゞ一人のこりゐてゆびとしん書をとりかへすてだ
てもなく家内をにらむばのりまてとがやにぞかへりける○さてまた

手がひの小ざるハかのもびとしん書をうバひとりて。しやうげんがま
へにもちもきけれバ将げんいぶかしみてひらきみるに。雲谷がしもせ
きとおぼしく。娘におくりししん書また紙につゝミしハなまちした
る小ゆびにてありけれバ。それもあくくわいちうしてまづおんびんに
とりおきぬ○斯てありぬるが小栗はせべの両人このほどなかよから
ぬていを見て。しやうげんおげりハしくおもひけれバ両人のせかもの
をまねきて。りかいとときやうすハしらざれども車のわにひとしきふ
たりの門人なれバ。わが左右のつむさにたゞへて。らうすいの身のたの
みとおもへバ。このゝちあらためてもとのごとくわぼくあるべしとて。
さかづきととりかハさしぬ。そのひそこのまにハ二ふくのかけものを
かけたり。一ッハあらあらしきおにの身にころもをまとひ。左りの手に
ハ奉加帳といふものをたづさへ。みぎの手にハしゆもくをとりて。むな

もとにかけたる。かねうちならし。ねんぶつするていなり。またひとつは。そのかさきたるふなとさとおぼしきもの。ほかけ船に。のりたるかたちなり。やがてきやうげんがいふやうこれはさるかたよりのもとめによりて。たいぶれにゑがきしものなるが。此ゑになぞらへておんみちによきとしへのこともあり。今ろの一二をさとすべし。「うへみればおよばぬとぞおほかりきかさきてくらせおのが心に。と歌にもよみていましめたり人はこうまんとおごりとをかたきのごとくおもひて。つゝしむべきものなり。さらばみのかさなつゞれをまとひて世の人にれいやしまるとも。あやにしきのこゝろをだにもつときは。つひに身をたて名をあげて。かくれがさのかくれし身もかくれざとのいんとくにてかくれそのゝたからとえたるにひとしく。おのづからふうきとなるべし。水ははうゑんのうつはにしたがひて。すぐなるものなれども。くせあらきときは。なみたちてふねをくつがへす。水あるとも船なければわたりがたく。舟あるとも水なければわたりがたし。舟のほと風ともまたしかなり。人のみちもこれおなじくして。ばんもつわがふせざるときはみなやぶるゝもとひなり。またつゝしみおそるべきは。こうげん。れいしよく。かんねい。じやよくのよこみちにはしるとなり。心の舟。心の水にろむき。心のは心の風にさかへば。五常のみちにはづれてよこしま非だうにしづみもつべし。また悪もあやまりて善にあらたむればおにもほとけとなるぞかし。心ゆがみてへつらふものは。すみぞめの衣をまとひし鬼の口づから。あみだぶつとなふるにひとしく。聖じんのおしへたまふところあり。これはたはぶれのことなれども。ゑそらごとゝおもふべからず。とねんごろにきやうくんしければ。両人のわかものかたじけなしとて。くつぶくしてさりぬ。しかるにうんこくはをしへのことをもちひずし



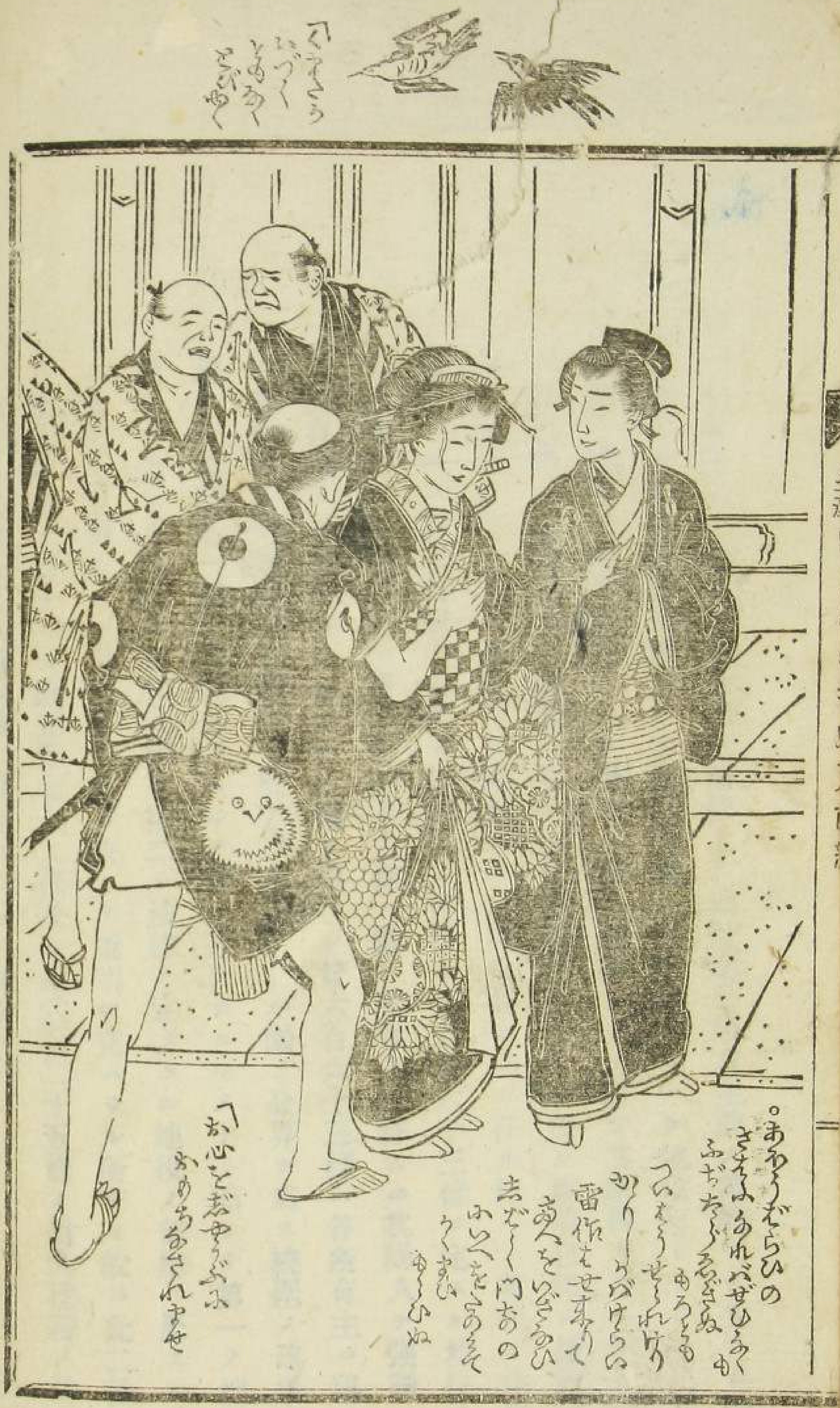
て。おもひけるはさいつころうばはれししんしよと小もびれきはめてしやうげんが手にわたりしならん。かれ後日にそぢをうくるのもとおり。このうへはしやうげんをひそかよびくがいするのはかなしとて。わる日わぼくのへんれいとてわが家にまねき。かねてよりたくみたる。どくしものてうしをとりてすてよなかむつぎたるところへ。このひも手がひの小ざるれいのごとくかたむらふありしが。ひところおめきさけびて。しやうげんが手よとりつき。かのさかづきをとるよりもやくのみほしぬ。うんこく。どくしゆのあらそれんとをおそれて。こしがたおぬくよりもやく。さると。どらへて。さしころしぬ。このさうどうにてうしころびて。あたりはさけにひたしけるが。しやうげんがあふぎのはねは。さんごじものおやぼねありしかば。たちまちくだけて。とびちりぬ。しうるにかのさるが身うちはむらさきいろよかはりければ。どくしゆなること

をさとりて。にわかにふくつうといひなして。わがやまぞかへりける。このゝち。うんこくれてらのさるを。てごめところせしつみよりて門人のうちを。のぞかれ。いんしんふつうとなりしかバ。つめしよにて。出合ふともむごんなりしとかや。

○こゝにまた六角家の奥方ハ。近松御坊のあみだによらいとしん〳〵ありて。たび〳〵さんけいしたまひしが。彼いへのちやうほうなりし宋のきそうくわうていのゑがかれたる。鷹のかけものを上人よかづけものに給いるべきむねにてあづかりのやくにん。小栗藤太郎かけものゝそこをたづさへおんともして。でらうへまゐりぬ。此日おんとものめん〳〵ハ土佐のしやうげん。長谷部雲谷をしじめとして。おく女中にハ此ごろ彼そばづかへよめされたる。ゑぎぬにいたるまで。けふをそれとよそほひて。方丈よぞとほりける。雲谷ハけらい犬上團八といふもののみ。しめしあはせて。ひそかにまたかのかけもののとうぞひとり。そこのなかよりふぢ太郎。ゑぎぬがしんしよとすりかへおきうまし〳〵と。したうちしてそらうそぶきてぞゐたりける。さても雲谷はおく方のおんまへまでかけものゝそこのふさとあくれバ。こはいかにまたかのゑにはあらで。わざめきたる。二通のふみあり。宛名はしれしふたりのもの。さてはきそうくわうていのかきたまひしめいぐゑのきどくまでおのれととびうせたるか。このいろぶゑにむけたるおや。たか化していろぶゑとなるといふことは。ぐわつれろまもまだきかず。たゞしいひわけあることとか。たからふんしつれ。ぬすびとぞうせん。ふぎいたづらはおいへのごむつと。いひぶんあるかとにらみつけ。このいてんのあたりまなこま。あくまであくこうざうごんし。しんしよをたかちかまよみあぐるにぞ。おくがたをむじめしやうげんも。がんせんのおちどますくひがさく。手もあはせあぎ

るばかりなり。うんこくあふりをねめまわして。ずんさたつて二人をひ
きすゑ。さん〴〵にてうちやくする。ふぢ太郎めんぼくなけれバ。いさぎ
よくせつぷくと。かたなのつかに手をかくれバ。おくがたおしとゞ
めたまひ。うろたへしかふぢ太郎たからふんじつのおちどによつて。この
ばよりかんどうなるぞ。しゆう〴〵のえんのきるゝがかなしくバ。ふん
しつのたからたづねいだし。かんどうのわびするこゝろはつかざるか。
はらきるとはふしよぞんもののめとの。しひあるとでにふぢ太郎ありが
たなみだにくれぬたる。もくねんたりししやうげんはむすめしぎぬを
えんよりけおとし。はつたとにらむめのうちみ。うるむなみだのこゑを
おちゝげ。ぬかになんぢおんしひふかきおくがたのおん目をかすめし
のみならず。ちゝが名までもけがし。ふらう。ふしよかんなるむすめはな
つてゐきなし。いまこのところにて。おやこのえんは。きつたれバ。ちゝと。

おもふな。わが子でないぞ。このうへ。いづくへもしるとも。またたのもし
きひとありて。ふうふとなるとも。こゝろのまゝ。みれんのうれがし。かま
はぬと。さりながら。父獨娘ひとりのけふが日まで。といはんとせしが。ひ
と目をかねとバをひきにまぎらして。かほにはなかねど。こゝろには。な
みだにむせびて。しかる氣はふうふとなるよと。とバのなご〳〵。とけし
ふたりが。むねのうち。うれしいやら。かなしいやら。ありがたなみだに。かれ
のなみだ。せがれの小がいよ。ながれなバ。はそのとかさや。まさるらん。しバ
らくありて。土佐はしやうげん。なにこゝろなき。うんこくを。しんよ下に
けおとしあり。あれらうぜきと。いはせもたてず。はつたとねめつけ。うんこく
のまんちくしやう。なんぢ。一人さいばんして。ひともたのまぬ。ふぎのせん
さく。かたはらいたし。いま一人ふぎのあひてがのこりしぞ。なんぢがせ
んぎはてぬるしく。うのあひてをもひきいだし。てゝとところにてせい


「くそさら
いつく
ともかく
どびゆく
○あやうぐらひの
さまはあれバせひもなく
ふだちやうもふさぎぬ も
ゆうべも
ついまうせんれけり
かりしらげけらい
雷作をせずして
恵へをいぎらひ
まがしく門おの
はしくをとうのそ
うくすい
ゆへふね
「お心をおやうぶふ
おめちあさんれやせ

「ごぞいちでへ
えんるめまなりふを
おひすしく
きりしらく
おあやあ
ぞんぶつ
「あんまり
ころりぐけを
たくさござるな
かつくりく
いめへすいは

むいするとの丶しをばらんこくいりて。たちあがり。そのせんぎれかつてしだい。このうんこくをあせけおとし◯むすめのわりれにとりのぼせて氣がちがふたか。とつめよするとしやうげんみ丶おもりけむ。いま一人のふぎれなひてればかでもなし。長谷部うんこくなんぢこ丶ろあおぼえならん。とくわいちうよりとりいだすれ。さいつころてがひのさるがうむひたりし。小ゆびとゐんしよをめさきへつきつけ。この小ゆびのぬしれたきこのゐんしよの名あてれ。いかにおぼえあらんときめつけられ身みあやまりある。うんこくれいちでんのいらへもなく。へいこうしてゐたりける。おくがたかくとき丶さまひ。おくきうんこくがふるまひかな。ひとのせんぎをさしいで丶かへつておのがあくじをあつ丶みし。ふらちもの。ミおく丶へのミでふしお。ふたこしもぎとり。このもんぜんよりおほうむらいにいたせよと。ありければうけたまわりいとて。てんでまわりだ丶たてきたていふく大小もぎとりて。ふるわんぼうにおれおびしめつけ。いぬがみだんぱちもろともみ近松御坊の門ぜんより。おほうむらひおしたりし。こ丶ちよかりし。ありさまなり。

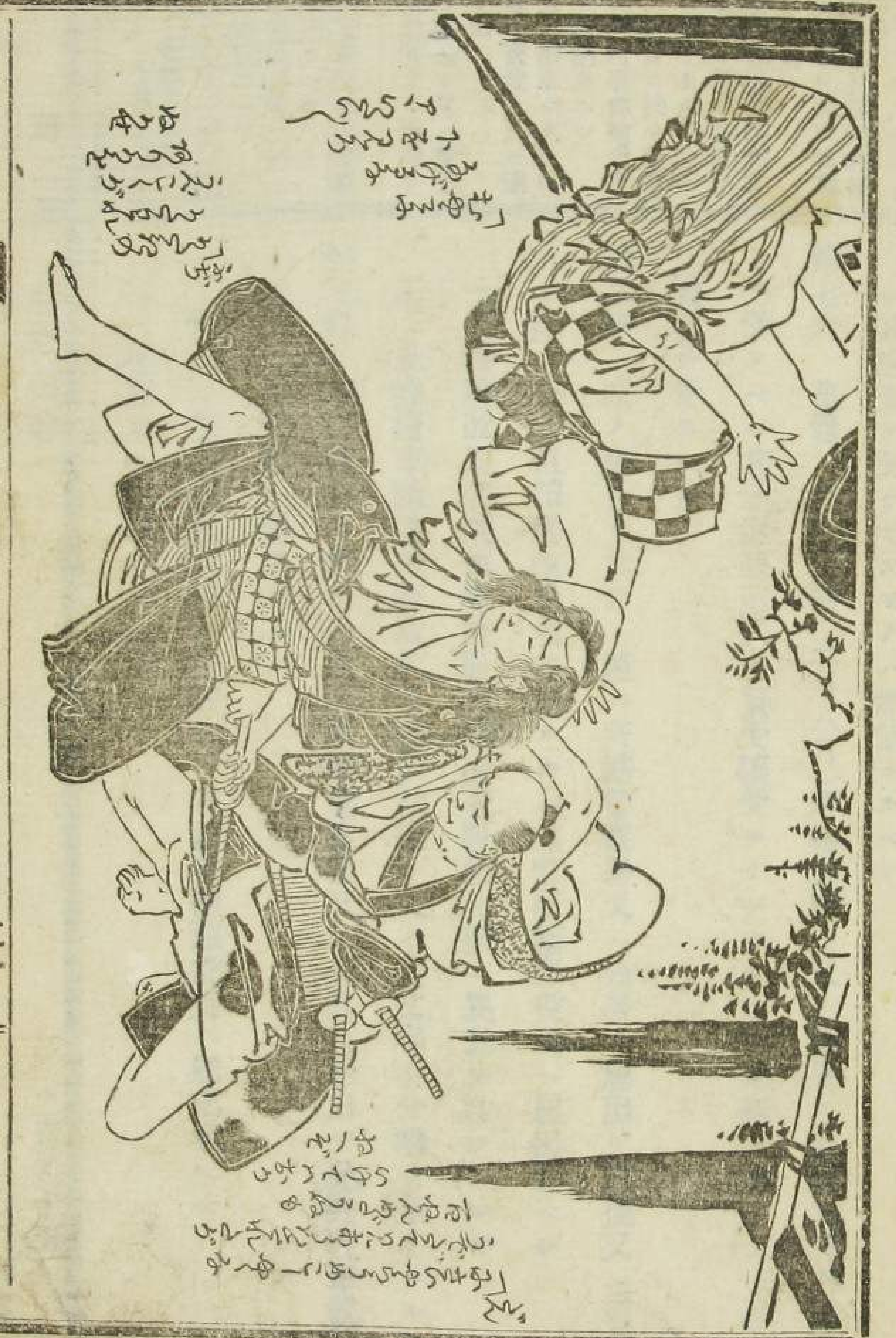
○かくて土佐のしやうげんれおくがさのできくわんをうおおしおのれいちにんあとおのこりてむんじをとりかたづけ夜みいりてのりものみてたちかへる。そのおりからちかねてまちぶせしたりし。うんこく。だんむちもりのこおげお身としのび。やごろよきづみねらひをかためてひいふつときつてとおせばあやまさずいちみの矢さきのりものみそつしとたつ。たしかみてごたへしすましたりと。あとをくらましみげうせさり。しゆしんておひしと見るよりもくせものをさおせやと。とものどもこ丶かしこかけめぐりぬ○こ丶みまたむすめゐぎぬ。ふぢ太郎。らいさく。もろともわかれをかおしみて。みえがくれみつきそひきたりしお。

かくときくよりおどろきあわてとはうにくるゝばかりなり。しやうげ
んはさしものてきずなすこしもくつせず。三人がとりすがるをろてう
ちはらひ。いる手とてらゆるいきせはしく。いかになんぢらなにものな
れば。めろ〳〵とはえづらかわくぞ。汝かんきうけしふぎものゝ二人(ふたり)に
れとむかれさんもけがられしゝ。らいさくむかりはふだいの忠(ちう)しん。な
んぢはまつでのわがゆいごん。しやうねにいれてわするゝな。てよびま
ちぶせしてしきを。いなとせしての矢(や)さき。ひつぢやう。うんこくはうた
がひなし。なんぢいまよりこゝろをそげまし。じがうらみをむくふて。し
もらのもうしうそらさせよ。このふたこしれ。いへのたからこれをなん
ぢにもゆづるなり。あれなるみなれぬ。じくもののどもれ。ふうふづれのたび
びと。らいさくなんぢが。いもとく。とゝの。なに〳〵いもと」なるとや。さ
つするに。わがむすめ。かんどうしたるゑぎぬにおなじくいろぐるひと

見うけたり。そなものもおやにかんどううけたよ。なたとひこなたしものおやたちがかんどうれそるとも。ひとつのかうをさてしうへれ。くさぞのかげからもるされうぞ。さぞこなたしゆのおやの身はおもてむきよりもふひうけ。ふうふなかよくそやう。うひまでのかほ見たならば。なんぼうたのしかるべきにおもふかひなきかんどうれ。ぶしのいきぢの。せひもなや。我が身のうへにつまさるゝ。これとおもへば。さきだちしばばれおやかりもの。ながいきそるれ。そぢおほしと。ひがうの死れいとれねど。えんのきれめの。かなしさよ。とおくばになみだかこませて。がづよきこゝろもとりこだせばたがひに。ちゝともこちと。ともいれれぬぎりとおんあいのなみだにたもとをしぼりけり。

○かくてしやうげんがこがいれ。らいさく一人のむからいにてぼだいしよにぞなくりける。さてもかんどうの二人はこれよりふんしつのにう

らをたづねいだし。またしやうげんがかたきとうたんとてこゝろざしければ。ふぢ太郎はげんぷくしてふうふ。らいさく三人にてまづ東ごくへとおちいでなり。しかるにもくてとうかいだうふぢさはのしゆくにつきなるが。うんこくざん八。かねてこのやどりにすまゐければ。ひそかにこの三人をみてかへりうちにせんとたくみ。あまたのあぶれものをたのみて。けんくわをしかけさせ。大せいにてみちをふさぎければ。三人のものどもいまはたまりかねて。そこでにけんくわとなりにけり。あくてもうくわんのきみちよりあまたのもるものおどりいで。みちをふさぎてしやましければ。両人はしぎぬをのこひてそたらきけるが。とあるつゝみの上にておがひふくみあひころびうちて。つゝみよりころころとまろびおちしが。さいはひなるかなつゝみのしたには數十間のふぢだなありてその上へおりたちてなほもひるまざるにかひしが。ふぢ太



郎は一せいにひきおろされつひまいとりまかれてゆくへしれず。ら
いさくこれをすくはんとあれてとびおりんとするとあろへまたむら
むらとたちかゝり。しぎぬをとらえゆかんとするをへせんで兩とうま
氣とうばゝれ。あぐみはてゝもみあふたり。かゝるところにいちゃんの
うせさつとふききたりつちけぶり天をおやふばかり一めんまわんや
のごとく。がんせきてぼくもさく〳〵となりどよめきて。おの〳〵なまし
ひをとばそところに。たちまちあたりのこずゑよりあまたのくまたか
はねをならべてとびくだりむらがるやつばらをかいつかみて目口は
なのわかちなく。金銀のつめとぎたてゝかきむしりくろがねのくちば
しいうふしてつゝきなて〳〵。あまたのひとをおひめぐりてなやまし
けれバみなちり〳〵にげうせける。此くまたかいかなればかくきう
なんをすくひしぞとおもふに大津又平がかきたりしくまたか師匠を

おもふいつしんにて。このところへとびきたり。しぎぬがなんぎをすく
ひしなり。かゝりしかバにげちるやつばらおひつめて。もとのふぢだな
へひきかへせバ。こはいかにふぢ太郎はわけにろミてしゝゐなり。さて
はかたきのまはしもの大せいにてうたれたまひしか。せひもなきでし
やうがい。としがいをとつてひきおこせバ。しぎぬはみるよりきやうき
のごとくこはいかにせんあさましやと。とりつきなげきかなしみしが。
うんとばかりにもんぜつせり。らいさくおどろきかきいだきて。くすり
よ氷よとかいはうしけるが。やう〳〵あいきふきかへし。めのいろかは
りて。すつくとたち。あたりをながめてうろ〳〵きよろ〳〵たちまちこ
ころもみだれがみ。右へはしり左りへはしりしやうたいなくやら。わら
ふやら狂人はしれバふきやうじんともおはしりて。らいさくはもてあ
ぐみたるぞうりあり。これよりらいさくはなみだながら。ふぢ太郎がし

がいをとりおさめんとするところへ。またも大せいとつてゝへし。しや
まをするよぞせんかたなく。きやうじんをともなひて。やうやくよ。お
ちのきけり〇かくてしぎぬはさらに正たいなく。「なんドやわがこひ
びととねずみがひいたコリヤとかしやねこそとるよなぬまほしくれ。
あれ〳〵あしこよそれそこよいかふうんこくがまはしものきちがひ
よ。やうさいよ。とかいどりしやんと小づまをとり。わがつまおこせとお
しよせてもうなれぬとじや。なりやんせぬ。ろも〳〵わがつまれてぞの
その日さきそめて。ふぢのはなぶさながかれとひのりしかひもなさ
けなや。はるとなつとのふるそちかけて松がいとーう。からそつしめつ。
いろをあらそふはあざうり。あざなゆかりのいろぐるひ。うちむらさき
のふぢよ。ふぢ。これ〳〵まゝあましまそるあくしやうをとこ。といひつ
つもふぢのひと之だをりとりて。あうひがつまよこひ人よいとしとの

ごとかきいだき。あるひはわらひあるはなきくるひありくぞせひもな
き。

それはさておきこゝにふしぎのとあり

小ぐりふぢ太郎はわるもの
どもふころさをふぢだなのもとよすてられしが。たちまちのめのさめ
しごとくいきふきかへして身うちをみるに。いつてんのきずだになし
しかるふさいせんのさうぞうよてはだのまもりをおとせしが。せんぞ
宗丹のしがきたりしあみだによらいのそんぞうかたはらにおちゝり
あり。たちよりてこれをみるにもつたいなくもろんぞうの御衣は血に
まみさずたく〳〵によひきさけありければ。さてはせんぞのめいぐわのき
どく。ひとつにはひごろしん〳〵したてまつる。近松御坊のあそだによ
らいわが身がはりにたちたまひて。いのちをそくひたまはりしか。あら
ありがたやとふしおがそかんるいきもふめいじけり。さりながらわれ

れふしぎにたえかれどもしぎぬ。らいさくはいかゞなりしや。と四はう八めんをたづぬれども。さらにゆくへのしれざれば。もとのところへたちもどるに。しがきたるたかのかたちかーて。こゝに。おちゝりてありければ。ひらひとりてかんがふるにさいせんあまたのわるものをおひちらして。われ〳〵がなんぎをすくひしくまたかれてのしのせいまてありたるか。ひついは土佐のりうぎあるが。かゝるきどくとあらはすべきめいぐれきゝもおよばざりし。いかまもいぶかしきとありとてかのさかのしをとりあつめくわいちうしてたちあがり。またもやひとのくるかとせんでおこゝろをくばりまづそのところをたちさりけり。

〇こゝおまたへいがにくしんのおとゝは。しやみいちといふもうしんなりしが。くまをへだてゝ生こくのみちのくに。そまひけり。うまれつきおんぎよくにみやうをえたまし。なかんづくおもしろきはみちのくぶ

しのじやうるりなり。さるみよりてひと〴〵のちやうあいふかく。かしこ。こゝのなさけにて。くせんぎん二百両あつまりければ。くわんゐをとらばやとて京都へこゝろざしけるがとうごくのなんとおそれてかねおきていみもてなし。みちすがらせんだいじやうるりとかたりて。いつせん半わんのかうりよくをたのみ。京都へのぼりしはじりよふかきふるまひなり。

○仙臺浄瑠璃　せんくわい門やぶり

これはさておきこゝに漢の高祖の臣樊噲といふもの一人おはしますとな。おぼしめせ。主君の歸館をむかひのため。しやうぞくの身をかため。鬼面のいた大とうれん小とうれんふたふりの劔。金だおな銀だがなあたり八けんタアダハア　ひかり〳〵と。ひかりわたるを十もんドのさぞまさかぜふきまれ風まけぞべいとヲヤ〳〵〳〵〳〵あぶないとだあもさ。さててつもんまつきしかば。ふんぞたかつてござでゑぞりあげ「主君のむかひまぞんくさいがでもつたアてば門のひらけもんのひらけとよばれつたりうちまれくさんふん大きまたまげヲヤホホ〳〵〳〵でかぞちない。あぞれものツレと不ぞなと。とびらへさへてひのゆれば。などかれもつてたまるべきむねぞり。くわんぬき。ゆさ〳〵〳〵めき〳〵〳〵とおしやぶれば水をたまらぞくわんまんぞもおしまうたれて目玉さとびいでくびはどうへ。へしこんでへそのあたりでくれぞら〳〵〳〵アとぞとなへける。このせんくわいがちからのほどゆゝしかりとをなか〳〵まうすぞかりはなかりけり

題瞽目人詩
筋從盤外夾
針向嘴邊穿
逢客誰施禮
斜頭只聽聲
明人之作

○さてもらんさくれきやうらんのしぎぬをかいやうして。しばらくふ
おさはのしゆくふかくれそみかたきのありかをたづぬるよ。かたきれ
かみがたすぢへのぼりしと。うばさとさいはひまた〳〵こきやうのあ
たへ。たちよらんとしんしうよこすかまで。きたりしがしぎぬがきやう
らん。いよ〳〵つのりて。かいやうふなんぎしけきが。このところみとう
りうし。いしやをまねきてりやうぢそきども。くすりいきかでやくだい
よさしつまり一まいのつゞれをぬぎて。やう〳〵よ日をおくりしが。や
しなふてぶてもつきければ。よてすりのかたやとりよなはゝ〳〵ろよて
小屋をしつらひ。このうちにしぎぬをかくまひ。つひよいこつしきとな
りさがりしかば。はさもふのしよくもつもこゝろふまかせぬ。ひんくの
かんなん。なミだよわかしおきくらし。めぐるつきひもふたとせあまり。
おもひにやつるゝうきみよりものおもひなき。きやうぢよのしぎぬ。か

みれおどろかのびきだれ。身れてけむして。紙帳のうち。日々よやつるゝありさまに。むかしとしのびもくするを。あんじわづらふばかりあり。義氣。さんてつのらいさくれいしのへついに。つちのかま。めしをたくかもみそをるにも。どあべひとつをゑのミかて。おちばのきえをさしくべる。たけのひばしのひよまして。みぢかくなるもわがみぞと。うきとりこつぞだうりある。

○世のたつわざもしらぬみれせいいつぞひのくふうにてこゝろのたけにむすびたるわらでつかねし大とりげふりにしむかして吾きたるしもくいり。げばさき。げんくわんまへ。おあべがういもちねれゑぶもてこい。ぶつてんだ。どつこいふり〳〵ふりいぶぞ。やつてやりもち。くれべいふるべんさきのけろ。かゝととふんづけ。てさきとそろへおとがひつきだし。しててめさおかげでかたぞねはりまのかみ。のりぶしのぎやうれつとうかぬ恋とうき〳〵と一文奴にさまをかへて。主人の娘と。かいやうしなよとぞうゑきにあひのしゆく。かいだうをきみちきらひなく。まんのだいあしつくりひげ。あぶらをしぼるそのひすぎ。ひとのあさ寄に。やう〳〵とけふまでいのちをつなぎせに。一錢二錢のろではうがに。ほろきけぶりをたてけるが。さいつころよりとりめをわづらひもふぐれよりれもうもくどうぜんものゝあやだにわからねバ。なんぎかさなる身とうらみ。とこあきにぞなきゐたる。しかるにかたきうんこく。ぶんをち。いかにしてかしりさりけんりやうにんのもの。こつしきしてこゝにゐるよしうかゞひて。あるよひそかに。ひかん小やにしのびより。ことばをそろへて。いふやう。めづらしやゑぎぬらいさく。あんだちがおやのかたきとつけねらふ。はせべうんこく。いぬがみだんばち。はあところへてこゝにありよそのかたきれにげかくるゝを。だいしやうぶのわれ〳〵

ル者ハ輓子タルヲ得ス其他ノ犯罪ト雖モ監視中ノ者亦同シ

第廿一條　輓子ハ左ノ制限ニ従ヒ地方毎ニ一定ノ服装ヲ爲スヘシ

一　着服ハ法被股引但シ雨雪泥濘ノトキハ半股引ヲ用フルモ妨ケナシ

二　冠リ物ハ帽子又ハ笠

三　雨具ハゴム引又ハ桐油製

第廿二條　法被冠リ物雨具ニハ組合及鑑札ノ番號ヲ記スヘシ

第三章　輓子就業制限

第廿三條　輓子ハ鑑札及營業人力車取締規則并賃錢表ヲ所持シ警察官吏又ハ乗客ニ於テ見ンコトヲ求メタルトキハ直チニ之ヲ示スヘシ

第廿四條　頬冠鉢巻其他不体裁ノ形装ヲ爲スヘカラス

第廿五條　路上ニ彷徨シ又ハ佇立スヘカラス

第廿六條　乗客ノ承諾ヲ得ス

一　年齢滿十八歳以上ニシテ身體強壯ナルモノ

二　其土地ノ路程ヲ略知スル者

第二十條　前條ノ資格ニ適合スト雖モ強竊盗強姦及ビ幼者ヲ略取誘拐スル罪若クハ過失ニアラサル殺傷罪ヲ犯シタルモノハ輓子タルヲ得ス其他ノ犯罪ト雖モ監視中ノ者亦同シ

第二十一條　輓子ノ服装ハ左ノ制限ニ従フヘシ

一　着服ハ法被股引但雨雪泥濘ノトキハ半股引ヲ用フルモ妨ケナシ

二　冠リ者ハ帽子又ハ笠

三　雨具ハゴム引又ハ桐油製

第三章　輓子就業制限

第二十二條　輓子ハ鑑札及ビ人力車取締規則并ニ賃錢表ヲ所持シ警察官吏又ハ乗客ニ於テ見ンコトヲ求メタルトキハ直ニ之ヲ示スヘシ

第二十三條　頬冠リ鉢巻其他不體裁ノ形装ヲナスベカラズ

ニ從フヘシ
一　一人乘ハ横巾內法二尺未滿二人乘ハ二尺以上トス
二　車體ハ無地漆塗中張ハ革天鵞絨羅紗等ヲ用フヘキモノトス
三　車體ニ同キ塗色ノ泥除ケヲ備フヘキモノトス
四　車體ノ背面中央ニ方一寸ノ楷字ヲ以テ組名及番號ヲ判明ニ記スヘキモノトス
五　ゴム引又ハ桐油製ノ母衣及前掛ヲ備フヘキモノトス
六　不潔ナラサル蒲團及膝掛ヲ備フヘキモノトス
七　組合及車體ノ番號ヲ記シタル細長提灯ヲ備ヘ且蠟燭摺附木ヲ用意スヘキモノトス
第十九條　輓子ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ限ルヘシ
一　年齢滿十八年以上ニシテ身體強壮ナル者

第十六條　身元保證金ニ缺額ヲ生シタルトキハ十日以內ニ完納スヘシ其缺額ヲ納メサルトキハ營業免許ノ効ヲ失フモノトス

第十七條　營業者撿查證鑑札壹個ニ付手數料金三錢ヲ納ムヘシ

第二章　車體ノ構造及ヒ輓子ノ資格

第十八條　車體ハ堅牢ニシテ其構造及ヒ附屬品ハ左ノ制限ニ從フヘシ

一　壹人乘ハ横巾內法貳尺未滿貳人乘ハ貳尺以上トス
二　車體ハ無地漆塗中張ハ革天鵞絨羅紗等ヲ用フヘシ
三　車體ニ同キ塗色ノ泥除ヲ備フヘシ
四　車體ノ背面中央ニ方壹寸ノ楷字ヲ以テ組名及ヒ番號ヲ判明ニ記スヘシ
五　ゴム引又ハ桐油製ノ母衣及ヒ前掛ヲ備フヘシ
六　不潔ナラザル蒲團及ヒ膝掛ヲ備フヘシ
七　組名及ヒ車體ノ番號ヲ記シタル細長提灯ヲ備ヘ置キ且蠟燭摺付木ヲ

にげもせぬ。はしりもせぬ。かへりうちにぶちはなして。まくらをたかく
ねるためはかたきのかたうち。たづねあるき。やう〳〵めぐりあたりし
いうならがためかれふしあれせ。かたきうちのしやうぶせよと。らいさ
くが。とり目とつけてこふところ手してのゝしりけり。

一此すしいゝなるやまづこうへんを見てしりたまふべし一

○こゝはうきよまたへいれ。いへまづしくて。なんぎしけれバ師のあだ
とむくはんともつきひをむなしくあかしくらし。いつとておもひたつ
ひれあけきバ。やう〳〵はしあんをさだめてしよくへんろ。ぐしだうし
ゆぎやうとこゝろざし。ひとつはれ師のむすめのあとゝたづねてすけ
だちせんと。おもひきはめ。らうぼと福六がよういくれつまあふてはた
のミおき。とうごくさしておもむきしがたびのあもつれ。ふでとかこ。し
のぐのさとこを雨のふよもののもしぬ身のこゝろやすく。苦れなふはしの

これよりこゝろへん
やさうハうたよ
又平ふうふひん
くのうんか妻子
をそごひしてら
うみをえごろみ
ふくらぎこゝろ
しても師のあんぶ
やえんとをござとう
一命こいちが勝死
名ござね天下にかう
あいて狂さろん
おく又平てう
づおちふうのさろ
家さそがさぬけい
でらくるんをそ
らふことぶ上を
くらさうちすで
いおゝれおごさり
ふらくちうらう
ていわつのおか
むさしをうらし
たる大川ゑ
一さうしあり

うきよ又平が
ござんじの
たいぶれし

三馬作

二 車體ハ無地漆塗中張ハ革天鵞絨羅紗等ヲ用フヘキモノトス
三 車體ニ同キ塗色ノ泥除ケヲ備フヘキモノトス
四 車體ノ背面中央ニ方一寸ノ楷字ヲ以テ組名及番號ヲ判明ニ記スヘキモノトス
五 ゴム引又ハ桐油製ノ母衣及前掛ヲ備フヘキモノトス
六 不潔ナラサル蒲團及膝掛ヲ備フヘキモノトス
七 組合及車體ノ番號ヲ記シタル細長提灯ヲ備ヘ且蠟燭搭附木ヲ用意スヘキモノトス

第十九條 輓子ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ限ルヘシ
一 年齡滿十八年以上ニシテ身體強壯ナル者
二 其土地ノ路程ヲ略知スル者

第廿條 前條ノ資格ニ適合ス

第十七條 營業者撿查證鑑札壹個ニ付手數料金三錢ヲ納ムヘシ

第二章 車體ノ構造及ビ輓子ノ資格

第十八條 車體ハ堅牢ニシテ其構造及ビ附屬品ハ左ノ制限ニ從フベシ
一 壹人乘ハ横巾內法貳尺未滿貳人乘ハ貳尺以上トス
二 車體ハ無地漆塗中張ハ革天鵞絨羅紗等ヲ用フヘシ
三 車體ニ同キ塗色ノ泥除ヲ備フベシ
四 車體ノ背面中央ニ方壹寸ノ楷字ヲ以テ組名及ヒ番號ヲ判明ニ記スヘシ
五 ゴム引又ハ桐油製ノ母衣及ヒ前掛ヲ備フベシ
六 不潔ナラザル蒲團及ビ膝掛ヲ備フヘシ
七 組名及ビ車體ノ番號ヲ記シタル細長提灯ヲ備ヘ置キ且蠟燭搭付木ヲ用意スベシ

ト雖モ強竊盗強姦及幼者ヲ略取誘拐スル罪若クハ過失ニアラサル殺傷罪ヲ犯シタル者ハ輓子タルヲ得ス其他ノ犯罪ト雖モ監視中ノ者亦同シ

第廿一條　輓子ハ左ノ制限ニ從ヒ地方毎ニ一定ノ服裝ヲ爲スヘシ

一　着服ハ法被股引但シ雨雪泥濘ノトキハ半股引ヲ用フルモ妨ケナシ

二　冠リ物ハ帽子又ハ笠

三　雨具ハゴム引又ハ桐油製

第廿二條　法被冠リ物雨具ニハ組合及鑑札ノ番號ヲ記スヘシ

第三章　輓子就業制限

第廿三條　輓子ハ鑑札及營業人力車取締規則幷賃錢表ヲ所持シ警察官吏又ハ乘客ニ於テ見ンコトヲ求メタルトキハ直チニ之ヲ示スヘシ

第廿四條　頭冠鉢卷其他不体

第十九條　輓子ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ限ルベシ

一　年齢滿十八歳以上ニシテ身體強壯ナルモノ

二　其土地ノ路程ヲ略知スル者

第二十條　前條ノ資格ニ適合スト雖モ強竊盗強姦及ビ幼者ヲ略取誘拐スル罪若クハ過失ニアラサル殺傷罪ヲ犯シタルモノハ輓子タルヲ得ス其他ノ犯罪ト雖モ監視中ノ者亦同シ

第二十一條　輓子ノ服裝ハ左ノ制限ニ從フヘシ

一　着服ハ法被股引但雨雪泥濘ノトキハ半股引ヲ用フルモ妨ケナシ

二　冠リ者ハ帽子又ハ笠

三　雨具ハゴム引又ハ桐油製

第三章　輓子就業制限

第二十二條　輓子ハ鑑札及ビ人力車取締規則幷ニ賃錢表ヲ所持シ警察官吏

うきよゑし。ゑしやくもゑく。こゑはりあげ「これハ江州大津のめいぶつ。子どもたらしのたはぶれゑ。ぴやうぶ。かけもの。おのがみゑだい。とさのゑかゝうとよむはりて。くにぐ\とぞめぐりける

大津土産 吃又平名畫助刄前編畢

川越町字小仙波

吉田々極